施工者に幸あれ 第75回

水戸に在り
構造家・倉持勝己

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco◉Switch・エンタテインメント

■川口衛門下

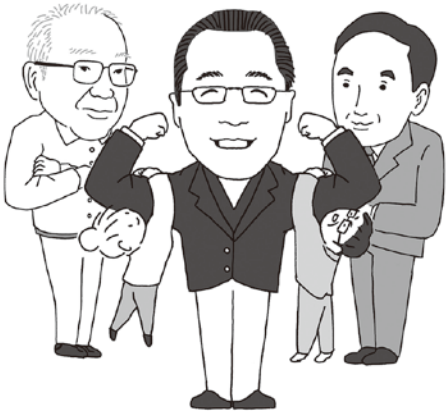
倉持勝己さんは，法政大学に入学して間もなく大構造家・川口衛教授に衝撃を受けた。各教授が建築通論で行う講義で見せられた代々木競技場第一体育館の施工現場のビデオ。建築には構造設計というこんな凄い世界があったのか…と。迷わず川口研究室のドアを叩くことになった倉持さんは，学部も大学院も川口衛教授一筋となったのです。

そもそも建築設計の道に誘ったのは両親のアドバイスによる。茨城県阿見町で棟梁だった父親を見て育ったので，特に木造住宅には興味があった。大学進学をせず大工の修行をと考える息子に「図面を引く側がいいのではないか」と勧めた。実は，大学院の卒業時も，まだ大工志向があった。奈良の鵤工舎に出向いて，宮大工の小川三夫さんに会いに行ったほどだ。宮大工の世界に構造界から新しい息吹を吹き込むことになったかもしれない倉持さんです。

研究室では，前田建設工業とのテンショリングの実験が思い出される。トランスや応力の解析の相談や報告をしに，川口教授の部屋のドアを叩くときの緊張感も，今は懐かしいと語る。一旦話し始めると，温かい人柄が伝わる先生だが「オーラが有りすぎて会話を楽しむゆとりはなかった」。

■三上清一から金箱温春へ

地元に帰り「県内なら三上建築事務所へ」と，心に決めて入所。まだまだ構造という分野の，真の仕事が確立されていない頃だ。意匠の下請的な立場での構造設計業務には，楽しさが欠けていた。首を傾げながらの仕事振りを見たのか，当時の三上清一所長が嬉しい出向を命じた。県の陶芸美術館の構造設計を，構造家・金箱温春さんの元でするようにと。東京での1年半の出向期間中と，その後4年余りの三上建築事務所で顧問をしてくれた金箱さんからの教えが，構造家として仕事ができる自分をつくってくれたと感謝する倉持さん。



金箱さんと三上さんの縁は古い。高校生の金箱さんが三上さんに教えを請いにきたとき，未来の構造家としての力量を三上さんは見抜いたのだといいます。三上さんが金箱さんの師匠的存在だったことを覇志堂もよく知っているが，倉持さんの出向話は入所時からの水面下での予定だったらしい。金箱構造設計事務所とは，今でも太いパイプでつながっている。

置戸町図書館，豊後高田市図書館，中川学園の学舎，茨城県立石岡第一高等学校，下妻市立下妻中学校など，三上建築事務所の現所長である建築家・益子一彦さんとのコラボレーションでデザイン性の高い建築をつくり続けている。

■若者たち一緒に！

「構造設計者は建築家のイメージを具現化する，実際の建物に落とし込む作業を行う人間だと思います」。本誌2009年6月号特集「構造設計の先を見通す眼」でそう語る倉持さん。構造家としてチャレンジングなことをするとしたら，「デザイナーがそう望んだとき」とのスタンスを取る。だからこそ，さまざまな設計，建築家に出会いたいという。自分の構造設計に対しては，常に別の回答がなかったかと自問する真摯な構造家である。

プロとなって1年間は手描きに拘った精神や机の上の沢山のカラー筆記具から，クリエイティビティ豊富な設計マインドをもち続けていると見える。「楽しい」の言葉が出る倉持さんが一番欲しいのは，構造を一緒につくる若い仲間。深い影響を与えてくれた，川口衛先生や金箱温春さんに応えるためにも，今度は自分が次世代に構造設計の楽しさを伝えたい。清々しい笑顔で，水戸の構造家・倉持勝己は「若者よ！来たれ」という。